

0：「西欧中世文書の史料論的研究」の趣旨と活動目標

0. はじめに

本報告書は、平成21年度より4カ年の予定で、科学研究費補助金の助成を受けて活動中の共同研究について、平成21年度の研究成果の一部をまとめたものである。

ここでは、共同研究の趣旨と活動目標を提示する。

1. 研究の趣旨

本研究は、西欧中世文書史料を対象として、近年の西欧中世史料学・史料論研究の動向を整理・分析し、重要な論点を提示・検討することを目的とする。研究の成果は、「西欧中世文書の史料論的研究に関する研究の現状と展望」としてまとめるとともに、解説つき文献データベースを構築する。この際、西欧の主要地域や学界を広く視野におさめるとともに、日本史、中国史、イスラム文明史等との研究協力を組織することによって、比較史的観点を重視した共同研究を展開して、論点の明確化に努める。

近年、歴史学の実証基盤を揺るがす批判が多方面から提出されているが、実証的歴史学の立場から、このような動向を批判的に摂取し、対峙するためのもっとも有効な手段として、史料論に関わる問題関心がある。史料は現実の関係では何を語っているのか（史料の生成）、我々がそれを見ることが出来るのはなぜなのか（史料の伝来）、そもそも現実を「史料」として認識する歴史家の作業とは何か（歴史家の史料認識論）、などの問いかけがそれである。

この際、伝統的に、西欧の史料学研究において中心的な地位を占めてきた文書系史料についての研究動向を調査して、現在、史料学・史料論研究の最前線でどのような努力が積み重ねられ、新しい発想による研究が、いかなる論点を提示しているかを検討することは、以上の課題にそなえるための絶好の観測台の一つと考えられる。

本研究では、以上の目的を遂行するため、関心を同じくする研究者を広く糾合して、学界動向の整理と検討に努めるとともに、ときにゲスト研究者を招聘しながら、定期的にテーマを特定した研究会・シンポジウムを開催して、論点の明確化と共有に資する。研究会・シンポジウム等の活動はすべて公開するとともに、毎年度活動報告書を作成して、成果を公表する。最終年度は、学界動向論文と文献データベースからなる報告書を作成する予定である。

2. 研究の学術的背景

現在、史料論についての議論が隆盛を迎えている背景としては、以下の二つが考えられる。

1) 歴史学外部の状況。日本語で「史料論」と名付けられる領域が脚光を浴びた背景として、従軍慰安婦問題をはじめとする歴史認識問題や、その過程で生じたポスト・モダン学派による「実証批判」な

どがある。他方で、とりわけアメリカの文芸批評の影響を受けた「テキスト理論」が、テキスト共同体やリテラシー環境について、新しい認識をもたらしていた。したがって、(文書)史料についての議論は、「テキスト読解」を共通の方法とする、実証系の学問一般の成立基盤に直接関わるといえる。

2) 歴史学固有の事情。日本史領域では、90年代から活発化した「史料論」研究は、西欧中世史領域では、少なくとも70年代には、問題関心の刷新がその端緒についていた。ベルギーにおける「史料類型論」シリーズの刊行やドイツの「実践的リテラシー」共同研究は、そのもっとも重要な成果の一つである。せまく史料学研究に限っても、近年における研究の刷新と新たな展開の動きは顕著である。国際古文书学会や古書体学会の活発な活動をはじめ、各地の諸研究・教育機関における「史料学」、「歴史補助学」についての活動、研究集会の組織、データベース等の公表は枚挙にいとまがない。情報環境の急速な変容が、史料研究の基盤を大きく変え、新たな隆盛を可能とした事情もある。

他方、文書史料については、とりわけ以下の諸問題が学界の中心的な関心となっている。

1) リテラシー研究。前近代社会において重要なのは、普通教育が目標とする「全般的リテラシー」ではなく、生活環境と一体化した「実践的リテラシー」であり、これは、実務との関係で普及・展開したことがますます強調され、その具体的な実践の場として、文書史料をとりまくリテラシー環境が活発に議論されている。ここでは、文書の生成に関わるあらゆる諸問題が検討される。

2) 文書の機能、さらには利用・伝来。日本の古文书学界においても、様式論から機能論への関心の移行が指摘される一方で、アーカイヴズ学・史が近年熱い注目を浴びているが、同様の問題関心の変容が西欧中世史領域においても確認できる。

3) 古文书学をはじめとする史料学の方法論。古典的な史料研究は、なにより「原本」の忠実な復元を目的としてかかげ、そのため、具体的に伝来する個々の史料の「信頼性」の弁別のための方法論を練り上げてきた。史料批判やテキスト校合と呼ばれる作業がそうであるが、近年の史料論研究は、「原本」の復元にとどまらず、伝来するすべての史料を等しく過去の痕跡として認識しようとしている。そのために、古典的な史料批判を越えた、新たな方法論が理論的にも要請されている。

3. 研究の具体的目標と意義

本研究は、その端緒からはじめればすでに20年以上の歴史を有しているが、直接には、2002年に発足した研究会を母胎としている。幸い、2004年度から3年間の科学研究費助成期間中は、史料論のあらゆる可能性について、対象を狭く限定することなく広範に議論することが出来た。また、とりわけ日本史学界との交流を主眼として、他の研究グループとの積極的な共同研究を展開した。その成果は、毎年度刊行した年次報告書で逐次報告し、現在は、ホームページ上で公開している。

今回の4年間にわたる共同研究においては、とくに文書=アーカイブズ実務系史料を対象を限定して、研究動向の整理と検討を行いたい。この際、研究組織のあり方から、対象となる地域・学界は、主として、フランス史・学界、ベルギー学界、イングランド史、イギリス学界、イタリア史・学界となる。さらに、ドイツ史・学界とスペイン史・学界についても、一定の成果を収めることを目標としている。伝統的に史料学研究の中心であり続けている文書史料を対象とすることで、共同研究のさらなる深まりを期待している。

本研究は、以下の諸点で、独自の意義をもつと考えられる。

1) 西欧「史料論」研究者の糾合。日本の「史料論」研究は、現在のところ、日本中近世史領域やアーカイブズ研究において活発であるが、我が国の西洋史学界では、いまだに「史料を使った研究」以上の問題関心は薄い。他方、現地の文書館や図書館等での調査が容易になり、多くの有能な日本人西欧中世史研究者が輩出するなか、史料学・史料論についての本格的な共同研究は依然として少なく、多くの研究者は日本国内では孤立している。以上のような状況においては、このような共同研究を組織すること自体に意味がある。

2) 西欧「史料論」研究と日本の歴史学。歴史学界全般において、同様の問題関心が看取されるなか、西欧学界の動向を本格的に検討することは、日本における人文学・歴史学研究の成り立ちの歴史を考えると、その意義はとりわけ大きいと思われる。

3) 比較史。比較史という点でも、本研究は特別な地位にある。欧米との関係では、フランスを中心として、イギリス、イタリア、スペイン、ドイツを射程に入れ、さらに、対象となる時代も、中世全体を視野に入れている。さらに、日本史や東洋史をはじめとする多様な研究者との交流を実績としてもっており、共同研究、学術交流計画の実現性はきわめて高い。

本研究は、多様な研究者たちを糾合可能という、日本の西洋史学界のメリットを生かし、さらに、研究組織の外とも交流しながら、多様な個別世界の認識と、大きな問題関心の共有のための比較史研究として、学界に重要な貢献をなすことを企図している。

本研究は、大きく以下の二つの活動に分けられる。

1) 欧米学界の研究動向の網羅的調査とその検討結果の公表。具体的には、組織的・体系的に関連情報を収集し（書籍、論文、研究集会、学位論文、雑誌特集など）、その内容を研究会において共同で検討する。成果の公表については、データベースを構築する一方、学界動向論文にまとめる。

2) 共同研究の組織化。欧米の研究者や、日本の他領域の専門家と協力して、史料学・史料論についての共同研究を組織することである。その成果は、毎年度作成する報告書のなかで公表する。

4. 平成 21 年度の活動と本報告書

平成 21 年度は、関係文献の調査・収集につとめるとともに、9 回にわたる研究会を開催した。研究会の詳細は、付録のとおりであるが、それぞれは、以下のように位置づけられる。

1) 専攻する時代や地域を異にする研究者を交えたシンポジウム

—第 44 回。シンポジウム「リテラシー研究の最前線」

—第 47 回。研究会「ディルケンス教授研究会（東アジア文書論研究グループとの共催）」

2) 西欧中世史に対象を絞った研究会

—第 40 回。研究会「西欧中世史研究報告会」

—第 41 回。研究会「文書史料とはなにか 一類型と機能一」

—第 42 回。研究会「9-11 世紀の私文書」

—第 46 回、48 回。研究会「ディルケンス教授研究会」「キルデリクスとクローヴィス」

3) 研究動向共同検討会

—第 43 回。「私文書研究文献」検討会

—第 45 回。「ディルケンス研究会事前勉強会」

このうち、本報告書では、第 40 回報告と、編集の時期との関係で掲載出来なかった「ディルケンス教授研究会」をのぞいて、他のすべての研究会・シンポジウム報告要旨、および本書のために新たに書きおこされたコメントを掲載した。

研究会・シンポジウムで提出された報告は、いずれも精鋭な問題関心と作業の精緻さの両面で、個別論文としての価値を有するものであり、それぞれがしかるべきかたちで、逐次公表される予定である。この報告書は、各業績の速報であるとともに、各特集研究会へのコメントをあらたに掲載することで、いわば学問の立ち上がる場のドキュメントという性格を有している。その成果と価値については、読者諸兄弟のご意見、ご批判を待ちたい。

最後に、研究会活動および報告書作成という共同事業に、積極的にご関与いただいた方々に、研究代表者として、あらためて御礼申し上げる。

(岡崎敦)

参考資料

西欧中世史料論研究会履歴（場所の記載がないものは、九州大学文学部西洋史学研究室）

第40回

2008年4月19日（土）

西欧中世史研究報告会

藤本太美子「12世紀西部ノルマンディにおける文書実務 ―カルヴァドス県文書館所蔵
サン＝テチエンヌ修道院史料群の分析から―」

第41回

2008年7月5日（土）、6日（日）

共通テーマ：「文書史料とはなにか ―類型と機能―」

岡崎 敦「文書史料とはなにか ―序論にかえて―」

岡崎 敦「西欧中世の証書 ―問題関心の変容と研究の展望―」

山田雅彦「中世中期西欧都市による文書管理の多様性

―北フランス・低地諸地方を中心に―」

徳橋 曜「中世末期の中部イタリア都市における文書保存の意識と実際」

高橋一樹「日本中世文書の体系とその歴史的 성격 ―証書系文書と内部資料を中心に―」

第42回

2008年9月20日（土）

共通テーマ：「9-11世紀の私文書」

法花津晃「10-11世紀クリュニー修道院と在地領主 ―サン・ジャングー・ル・ナシヨ
ナル関連諸権利にみる紛争とその解決―」

足立 孝「9-11世紀ウルジェイ司教座文書群の生成論的検討」

城戸照子「9-11世紀イタリア北部のnotariusに関する最近の研究動向」

第43回

2008年9月21日（日）

「私文書研究文献検討会」

第44回（九州歴史科学研究会と共催）

2008年12月6日（土）

西南学院大学学術研究所大会議室

共通テーマ：「リテラシー研究の最前線 ―西欧中世史から―」

岡崎 敦「リテラシー研究の現在 —西欧中世史から—」

梅津教孝「中世初期のリテラシーと、初期カロリング王文書を書くこと・読むこと」

岩波敦子「史料学からリテラシー研究へ

—ドイツ・ミュンスター中世研究所の活動を中心に—」

永嶋哲也「コメント」

第45回

2008年12月7日（日）

「ディルケンス研究会事前勉強会」

丹下栄氏の報告と議論

第46回（名古屋GCOE講演会）

2009年2月23日（火）

名古屋大学文学研究科大会議室

「ディルケンス（ブリュッセル自由大学教授）連続講演研究会」

アラン・ディルケンス Alain DIERKENS 「キルデリクスとクローヴィス —歴史、考古学、文書作成— "Childéric († 481) et Clovis († 511). Histoire, archéologie et production de documents écrits"

第47回（「東アジア文書論」研究グループと共催）

2009年2月28日（土）

九州大学箱崎文系キャンパス共同演習室

「ディルケンス（ブリュッセル自由大学教授）連続講演研究会」

アラン・ディルケンス 「カロリング期の司教カピチュラリア —その性格、射程、伝播— "Les capitulaires épiscopaux carolingiens : nature, portée et diffusion"

第48回

2009年3月1日（日）

「ディルケンス（ブリュッセル自由大学教授）連続講演研究会」

名古屋大学での講演と同じ